

認知症カフェの設置

福留隆泰[†] 森 孝子* 大平千絵*第72回国立病院総合医学会
(2018年11月9日 於 神戸)

IRYO Vol. 74 No. 4 (176-179) 2020

要旨

国立病院機構長崎川棚医療センター(当院)がある長崎県東彼杵郡川棚町の2015年の人口は約14,000人、高齢化率は29.5%で全国平均(26.6%)を上回っており、認知症になっても安心して暮らせる町づくりが緊急の課題になっている。認知症カフェは2015年に策定された新オレンジプランの中で認知症ケアのひとつとして位置づけられており、認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき集う場と定義されている。当院が運営する認知症カフェ「さくら」は神経内科医師(マスター)と看護師が中心となり、リハビリテーション専門職や栄養士、療育指導室および事務職がスタッフとして運営している。2018年2月に起案を提出し、4月11日の開業を目指し準備した。ポスターを院内や院外、町役場や駅などの公共施設に掲示するとともに地域連携室に依頼して周囲の開業医や施設にも開業の案内をした。会場は病院の会議室を利用し約12名が集うようテーブルを2つ配置した。壁に写真を展示するなどしてカフェの雰囲気を醸し出す工夫をした。お茶やコーヒー、まんじゅうなどを提供し参加者が話しやすい空間を作った。認知症に関する情報提供用の冊子を並べ、認知症に関する寸劇をプロジェクターで放映した。日本光電社製のもの忘れプログラムを置き自由に使えるようにした。体操(コグニサイズ)や花作りを参加者全員で行った。月に1回の頻度で開催して一年が経つが認知度がまだ低く参加者数は低迷している。今後は行政やボランティアと連携し町ぐるみでの運用を目指す必要がある。

キーワード 認知症カフェ, 認知症

はじめに

認知症カフェは1997年にオランダでアルツハイマーカフェが開催され、認知症の人と家族が集まって自分たちの思い出を語る集会として始まった¹⁾。1999年に日本では滋賀県の藤本クリニックでももの忘れカフェが開催され、認知症の当事者が主体的に活動を計画し実施するという先駆的な取り組みが行われた²⁾。2015年には認知症の人が住み慣れた地域の

よい環境で自分らしく暮らし続けるために、認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)が策定された。新オレンジプランの7つの柱のひとつに認知症の人の介護者への支援があり、その政策として認知症カフェの設置が推進されている。厚生労働省のホームページでは認知症カフェの概要が示されており、認知症の人やその家族が地域の人や専門家と相互に情報を共有しお互いを理解し合う場と説明されている。

国立病院機構長崎川棚医療センター 臨床研究部 *同 看護部 †医師

著者連絡先: 福留隆泰 長崎川棚医療センター 臨床研究部 〒859-3615 長崎県東彼杵郡川棚町下組郷2005-1

e-mail: ereking@mua.biglobe.ne.jp

(2019年3月15日受付, 2019年10月11日受理)

The Establishment of Dementia Cafe

Takayasu Fukudome, Takako Mori* and Chie Ohira*, Department of clinical research, NHO Nagasaki Kawatana Medical Center, *Nursing unit, NHO Nagasaki Kawatana Medical Center

(Received Mar. 15, 2019, Accepted Oct. 11, 2019)

Key Words: dementia cafe, dementia

表1 認知症カフェの起案書

認知機能の低下した方やそのご家族そして地域の方が、住み慣れた地域で安心して生活を続けられるように気楽に集う場所とする。専門家を交えて相互に交流し、専門家のアドバイスや情報交換ができる「つどいの場」とする。

1. カフェに期待する役割
 - (1) 認知症の人が地域で安心して過ごせる場所
 - (2) 認知症の人を介護する家族の負担を軽減できる場所
 - (3) 認知症の正しい理解が深められる場所
 - (4) 認知症について気軽に相談できる場所
 - (5) 地域でのつながりや連携が深められる場所
2. カフェ参加対象者

認知症の人およびその家族、地域住民、専門職等、認知症に関心がある人
3. カフェ実施計画書
 - (1) 運営主体 長崎川棚医療センター
 - (2) カフェ名称

カフェとまと、カフェかわたな、カフェわぎゅう、カフェくじゃく、ものわすれカフェ、など
 - (3) 開催日時

・月に1回、2時間
 - (4) 実施内容
 - ・毎回飲み物とお菓子を購入して提供し、利用者同士が話しやすい空間をつくる
 - ※飲食代 1人200円
 - ・専門職による講話やレクリエーション
 - ・ボランティアによる演奏会を実施（音楽鑑賞）
 - ・ボランティアによる手芸
 - (5) 相談内容
 - ・専門職による相談の実施
 - ・家族や地域の人等から相談を受けたときに、話をしやすいようカフェとは別スペースを確保する
 - (6) 周知方法
 - ・チラシ作成
 - (7) スタッフ

医師、看護師、栄養士、リハビリ（PTまたはOT）

長崎県東彼杵郡川棚町の2015年の高齢化率は29.5%で全国平均値の26.6%を上回っている。2025年には36.5%、2035年には39.9%になることが予測されており³⁾、認知症患者も増えることが予想される。2013年にMatthewsらが禁煙や減塩の取り組みで英国では認知症が3割減ったと報告している⁴⁾が、20年間にわたる取り組みによる効果であり、認知症に対する取り組みは緊急の課題と考えられる。

川棚町では患者や家族が中心となった認知症の友の会はできておらず、川棚町包括支援センターが中心となって談話会を月に一回開催しているが、町民に十分に周知されておらず参加者は数名にとどまっている。病院が主体となって認知症カフェを運営することで、多職種の医療従事者が参入しそれぞれの分野で専門的な介入をすることで、参加者が多くな

ることが期待された。

認知症カフェの起案

2018年2月27日に認知症カフェの起案書（表1）を病院幹部会議の議案として提出した。カフェに期待する役割やカフェの参加対象者については問題なかった。カフェ実施計画書では、飲食代として200円を徴収することからスタッフに事務職を追加するように提案された。名称は未定で、スタッフや会場、期日、備品などを具体的に求めるよう求められた。3月13日の病院幹部会議で2回目の審議が行われ、名称を「カフェさくら」とすることが決まり、認知症カフェの規約（表2）を作成した。今後の課題としては、川棚町からの補助金の受給や製薬会社との連

表2 認知症カフェの規約

第1条	本カフェの名称を「カフェさくら」とする
第2条	本カフェの運営主体は長崎川棚医療センターで、カフェは中会議室に設置する
第3条	本カフェの参加対象者は認知症の人およびその家族、地域住民、専門職など認知症に関心のある人とする
第4条	本カフェの設置目的は下記とする <ol style="list-style-type: none"> 1. 認知症の人が地域で安心して過ごせる場所 2. 認知症の人を介護する家族の負担を軽減できる場所 3. 認知症の正しい理解が深められる場所 4. 認知症について気軽に相談できる場所 5. 地域でのつながりや連携が深められる場所
第5条	本カフェの運営のために下記の役員を置く <ol style="list-style-type: none"> 1. マスター 臨床研究部長 2. スタッフ 看護師長、副看護師長、栄養室長、療養指導室、リハビリ、事務、桜が丘特別支援学校
第6条	本カフェは毎月第2水曜日の13時から15時に開催する
第7条	本カフェの参加者には200円を徴収し飲食代金に充てる
第8条	本カフェでの下記の活動を行う <ol style="list-style-type: none"> 1. 飲み物やお菓子を提供し、参加者同士が話しやすい空間をつくる 2. 専門職による講話やレクリエーション 3. ボランティアによる演奏会や手芸 4. 専門職による相談 5. 必要物品として、もの忘れプログラム、血圧計、名札、プロジェクター、折り紙など
第9条	この規約は役員の3分の2以上の承認があれば変更できる 付則 この規約は平成30年4月2日から施行する

携、食品衛生法に基づく許可の必要性、賠償責任保険加入の必要性などについて検討することがあげられた。

認知症カフェの開催

2018年4月11日に第1回目の認知症カフェを開催した。会場の壁に飾り付けをし、棚には認知症に関する冊子を並べ、認知症に関するビデオを放映した。13時からの受付で、参加者は名札を作成した後で血圧を測定し、会場内にある認知症の冊子を讀んだり、認知症プログラムを試したりして過ごした。30分間ほど理学療法士による体操（コグニサイズ）があったが、2時間をただだと過ごす感じは否めなかった。15時に終了後は反省会を開いた。カフェの参加者は12名で、そのうち入院患者が4名だった。5月に第2回を開催したが、理学療法士が不参加でとくにスケジュールを設けずに2時間を過ごした。終了後の反省会では時間を持て余すという意見が多く、第3回からはスケジュールを組んで開催することにした。カフェの参加者は8名で、そのうち入院患者が3名だった。6月の第3回では、13時15分から45

分までの30分間は認知症の原因について医師が講演した。13時45分から14時15分までの30分間は理学療法士が体操（コグニサイズ）をし、14時15分から15時までの45分間は療養指導室の保育士の指導で折り紙による花作りを全員で楽しんだ。カフェの参加者は8名で入院患者はいなかった。7月の第4回も同様のスケジュールで、講演の内容は認知症の治療と予防だった。8月は夏休みとし、9月に第5回、10月に第6回、11月に第7回、12月に第8回を開催した。第4回のカフェの参加者は8名、第5回は12名、第6回は3名、第7回は12名、第8回は4名の参加者がいた。講演は認知症の原因と認知症の治療と予防を交互に繰り返した。保育士の指導で季節にあった押し花を折り紙で作成した。ランチオンマットやクリスマスツリーの作成も皆で楽しんだ。2019年1月、2月、3月はインフルエンザの流行期であり開催しなかった。

考 案

認知症カフェを病院が主催する利点としては、医師や看護師、理学療法士、栄養士など専門のスタッ

フがいることがあげられる。不慮の事故の場合でも救急外来を受診できるので安心感がある。バリアフリーなので障害のある人でも参加しやすい。しかし、病院のスタッフを2時間にわたり認知症カフェに配置すると他の業務が滞ってしまうので、スケジュールを組んで担当の時間に参加できるよう工夫した。月に2回以上開催することも他の業務の都合で難しいと考えられた。会場は病院の会議室を用いた。白い壁に飾り付けをしたが、カフェの雰囲気を醸し出すには至らなかった。今後の課題としては、行政と連携して認知度をあげ参加者を増やすことがあげられる。隣接する特別支援学校の生徒たちや地域のボランティアとも連携して、町ぐるみで認知症カフェを運営したい。

〈本論文は第72回国立病院総合医学会シンポジウム「認知症医療・ケアにおける機構病院の役割」において「認知症カフェの設置」として発表した内容に加筆したも

のである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。

[文献]

- 1) 矢吹和之. 認知症カフェ読本. 初版. 東京：中央法規出版；2016.
- 2) 藤本直規. 奥村典子. 続認知症の医療とケア. 初版. 京都：クリエイツかもがわ；2010.
- 3) 第7期川棚町高齢者介護福祉計画・介護保険事業計画, 平成30年3月, 川棚町.
- 4) Fiona E Matthews, Antony Arthur, Linda E Barnes et al. A two-decade comparison of prevalence of dementia in individuals aged 65 years and older from three geographical areas of England: results of the Cognitive Function and Ageing Study I and II. *Lancet* 2013 ; **382** ; 1405-12.